

岡本英利哉

出雲市内でFrenzyを営業。完全オーダーの仕立てから直しまで客の細かい要望に応え丁寧な仕上がりは、幅広い年齢層から支持される。実はエッジの効いたデザインの解釈が冴える。今回はアイスグレーの生地で一点もののコートを製作。
frenzy.amebaownd.com
insta: frenzy_minako

長崎誠

松江藩時代から続く藤細工の長崎家五代目。「かごはかごらしく」をモットーに風を含むようなふくよかさや品格を備えるのは高潔な人柄と長年に渡るものづくり人生あってこそ。置くだけで日常が豊かになる籠。松江市かんべの里に

吾郷直紀

出雲市平田町、木綿街道そばにて吾郷屋を営みながら紙の造形に挑戦する。糸綴じから全て手作業で行う上製本のノートは多くの愛好者を持つ。1ミリ四方の極小サイズで紙の象嵌をする作品を誕生させ、さらに発展している。
www.agouya.com
insta: naokiagou

宮本崇輝

富山ガラス造形研究所で教えながら独自の吹きガラス作品を展開し個展などで発表する。自然が表す美をガラス工芸ならではの手法で表現すること続けながらも、最近是用の美への関心から日常に溶け込むガラスについて追求する。意欲的な作品にもやさしさがにじむ。
takakimiyamoto.blogspot.com
insta: takaki_mottsu

藤原将史

松江市内大庭町にて木工の工房を持つ。大物家具からカトラリーなど小物まで一人で製作。使う人の立場を考え柔らかな味わいの裏には厳しい製作態度と絶妙なバランス感覚があってこそ。今回は栗の木の色味を生かしながらより静けさを感じるお皿が揃う。
masashi-fujiwara.com

川口淳平

米子市内にて mintchuchuleatherw を営業。革製品の製作販売を長く続けながら松江藤細工の一人者長崎誠に師事するようになり8代目襲名。金沢世界工芸コンペで大賞受賞。師の教えを元にしながら独自の藤細工の世界を展開する。
@mintchuchu_info
mint-chu-chu.com
insta: mintchuchuleater

樋野由紀子

出雲市平田町十六島にて工房を構える。簡潔にして品のある手織りの作品は多くのファンを持つ。人柄がそのまま作風となって現れている。控えめな作風ながら買手の暮らし場に置いてさらに光りを放つ得難い作品。
www.hino-atelier.com
insta: hino_atelier

船木伸児

松江市布志名の地に江戸時代から窯業が続く家系に生まれ、祖父、父が確立した陶芸を自分なりに継承しつつ独自の陶の表現として発表する。既存の解釈から自由に製作する試みに、古くて良いものを見て育った経験が生かされている。宍道湖を望む自宅兼工房には全国からファンが訪れる。

多久和淳子

古来からの火への神聖視を現代に活かすべくキャンドルなどを製作する。この秋から旧姓となり製作場所も心機一転しさらに深い読みを伴う表現が期待される。今回は初めてベンガラから採った染料で赤いキャンドルを試みた。
www.empfangen-candle.com
insta: empfangencandle

三原美保

島根県雲南市でジュエリーを製作。フィレンツェで学んだ洋彫り技法を中心に、新たに鍛金技術も学びながらオリジナルなものへ結実する試みを続ける。国内ではあまり見ない洋彫りの世界は精緻でどこまでも美しい。ジュエリーの範疇を超えて美しいものとは何か追求。
insta: mihomihara

林田摂子

松江在住。写真家2011年のひびきあうので「森をさがす」の展示をきっかけにして島根との強い絆が生まれ、結婚して島根で暮らす。子育てを通じ、移りゆく時の中で、ふとカメラを向けたところに手応えを感じて、写真集「森にふれる」を発表する。論を超えてどれだけ自分の写真になるか。今回の展示に意欲を見せる。
insta: hayashida_setuko

なぎらさちこ

独学で仕覆の技術を学び、それを生かした布小物を製作する。今回は樋野さんの手織りの生地、フランスの古布、国産の麻生地を持ちやすいバッグに仕立てた。シンプルなデザインだけに細部の細やかな仕上げに仕覆作りの技が光る。今後はさらに自分の作品として展開したいと意欲を示す。

中山晶子

東京都下北沢にてマヒナ ファーマシーを営業しながら、植物が内蔵する力を自己治療に用いるためのものに取り組む。奥深い理論を元にしながら使う人が心地よく用いることをモットーにして風が渡るような軽やかな商品が多くファンを持つ。
www.mahinapharmacy.com
insta: mahinapharmacy

高橋正訓

松江在住。鍛金技術を中心に金属加工の知識と技術は高い専門性を習得。長年、伝統工芸の新しい解釈に取り組み、模索する中で伝統技法にとらわれずアートを吸収した造形を展開。見えざる領域をカタチで表すことを続ける。周囲からは個展を期待。

2025 年現在、時代は急速に移り変わろうとしている。人工知能を誰もが手軽に使いこなす時はもうそこまで来ている。それだけに、自らの内から起こる言葉とは一体なんだろうと考える。言葉は単に必要なことを伝達するためのものではない。たとえば、目の前に赤いリンゴがあるとして、「美味しそう」と思った次の瞬間に、秋の、色づいた風景の中のいつかの自分が重なったりする。場合によっては現実に体験したことを越えて、いつの記憶かはたまた読んだ本からの印象か、もしくは誰か他者の記憶なのか曖昧にしてイメージがやってくることがある。不意に現れるイメージはどこから来るのか。

自分の身体を取り巻く「今」が刻々と移り変わるように、私たちは決して固定されず営々と移り変わる「今」を生きている。その移り変わりの一場面を捉えて「今」があると思っているが「今」は変わる、変わる。波が一つとして同じにならず変わり続けながら、けれども無数の波は海につながるように、まさしく「今」も無数に連なりながら確実に永劫につながっている。もしかすると、不意にやってくるイメージはその「永劫」からやって来ているのか。回りくどい言い方になったが、森にふれるとは、永劫にふれることではないか。かつて 18 世紀のロマン派の人たちは森を魂の領域としたように、森と永劫は近い。森にふれる。「今」を超えて「永劫」にふれる。

恐れなく曇りなく子どものように歌うように知らないうちに咲いていく花のようにして、まず心の先がふれる。そうして次に私たちは「ああ」と感嘆する。ところがここにある林田摂子の写真は「ああ」の前の意識すらない「あ」のわずか手前を写真にしている。せっちゃん是人知れず森にふれているのかと、彼女の沈黙に耳を傾ける。同時に、あの饒舌でない人たちが作るものたちに耳を傾け、どこからかやってくるコトバを見つめる。

・光・木の葉

一すじの草にも

我はすがらむ、

風のごとく。

かばそき蜘蛛の絲にも

われはかからむ、

木の葉のごとく

蜻蛉のうすき羽にも

われは透き入らむ、

光のごとく。

風、光、

木の葉とならむ、

心むなしく。

大木篤夫『風・光・木の葉』

「どういう写真なの？という問いに対し、かわりにと、林田摂子はある時、詩を見せてくれました。それがこの詩です。ほんの些細な目の前のこと、何もないところを見つめてその向こうにあるもう一つの営みを思わせる詩でした。写真集「森にふれる」は、せっちゃんがそこに居て受け取ったことを、カメラがかわりになって語っているのだと思います。この詩と限りなく同じなのでしょう」

高橋